特別記事 Interview

初来日のマッティア・オリヴィエーリに聞く
新国立劇場《ファルスタッフ》のフォード役

取材・文＝中 東生
Text=Shinobu Naka

イタリア・オペラ界に出現した、久々の「大物の予感」を漂わせる若手バリトン、マッティア・オリヴィエーリが、新国立歌劇場のヴェルディ《ファルスタッフ》にフォード役で出演するため、11月に初来日する。ミラノ・スカラ座のモーツァルト《にせの女庭師》最終稽古で、怪我した足の痛みと風邪を制圧して、成功を手に入れた彼をミラノへ訪ねた。

ポップス歌手志望からオペラ歌手へ

――アクシデントが重なっても成功できる秘訣は何ですか。

「集中力ですね。欲すれば何でもできる、脳が実現してくれます。風邪のことを考えても、エネルギーを消耗するだけでその状況は変わらないので、この状態の中でも、1カ月間稽古してきたことを100パーセント出せるように集中しました。足も不幸中の幸いでギプスは免れたので、おどけたポーズをとる時も、1カ月間使い慣れた軸足を替えることに集中し、風邪の影響が出ないように声を使うことにも集中しました。オペラ歌手は、世界で一番恵まれている職業だと思っているので、人に何かを与えられる幸せを満喫するのです」

――子供の頃、教会の合唱団で見出されたそうですね。

「2歳くらいの時から、教会でポピュラー曲を歌う合唱団に所属していましたが、僕の声だけが大きく通るので、4歳のとき、神父さまが母に『歌の勉強をさせるべき』とアドヴァイスをしたようです。母は幼少のころ音楽教育を受けたかったのに、貧しい家庭で叶わなかったことから、自分の息子たちには楽器を習わせたいと思っていて、僕も5、6歳からピアノを始めました。でも、楽器を通して表現することは自分には合わず、ポップスの歌手を目指し始めました。18歳でボローニャ音楽院に入っても、まだジャンルを迷っていると、伴奏ピアニストのレナータ・ネモラ先生が、昔の教え子の歌うロッシーニ《セビリヤの理髪師》に連れて行ってくれ、その時『これが僕の仕事だ！』と一目ぼれしたのです。ポップスでは音響さんが調整する、マイクを通した声しか届かないけれど、オペラは調子の善し悪しもふくめ、すべて真実が伝わります。才能があれば、わたって行ける数少ない世界だと思います。

「これが僕の仕事だ！」と一目ぼれしたのです

そのネモラ先生がマウリツィオ・レオーニ先生の所に連れて行ってくれてから、お二人には今でもずっとお世話になっています。ネモラ先生は第二の母親のような存在でもあります。

いよいよ来日するオリヴィエーリ。その声と演技が楽しみだ。インタヴュー時に筆者撮影

《ファルスタッフ》が初ヴェルディ

――そうして24歳でデビューしてから、ここ最近は更なる飛躍をされていますね。

プッチーニ《ボエーム》のショナールは僕にとってお守りのような役で、2012年にヴァレンシアでシャイー指揮、ダヴィデ・リヴァモア演出の《ボエーム》に出たことが転機となりました。その後、演技重視の役から正統派ベルカントへのターニング・ポイントが、今年フィレンツェで歌ったドニゼッティ《ファヴォリート》のアルフォンソ11世の代役を、8日間の譜読みで引き受けたことでした。指揮者のファビオ・ルイジからは*p*を極める助言をもらい、今後も2件のオファーをいただきました。これからはベルカントの役も広げていきます。

――「初ヴェルディ」の《ファルスタッフ》ではその両面が聴けますね。

フォードはラヴェンナのイタリア・オペラ・アカデミーで、リッカルド・ムーティの指導の元、演奏会形式で歌ったので、「次は演技付きで」と思い、1年前にボローニャで新国立歌劇場のオーディションを受けたのです。フォードのアリアはこのオペラの中でもいちばん好きな場面で、妻を疑い、変装するまでの心理描写が面白いです。それに、日本に行くのは子供のころからの夢でした。日本の文化や食が大好きで、日本人の忠誠心や正確さは北イタリア人の僕に心地よく、日本人の友達もたくさんいます」

――これからの出演予定は。

モーツァルト《フィガロの結婚》の伯爵が初役、バイエルン州立歌劇場やベルギーでデビューし、フィレンツェ五月音楽祭やグラインドボーン音楽祭にも再出演しますが、今は日本行きが楽しみです。

Mattia Olivieri speaks about his music carrier and the role Ford of "Falstaff" by Giuseppe Verdi.

マッティア・オリヴィエーリ　Mattia Olivieri

1984年生まれ、イタリア・サッスオーロ出身。ボローニャ音楽院とフェルモ音楽院で声楽の勉強を始める。マウリツィオ・レオーニに師事。2009年、ボローニャのイタリア・オペラ研修所に入る。2008年、トスカーナ音楽祭等でプッチーニ《蝶々夫人》の皇宮、ロッシーニ《セビリヤの理髪師》のフィオレッロでデビュー。以後、イタリア期待の若手バリトン歌手として活躍、注目を集めている。

■公演情報

新国立劇場《ファルスタッフ》（ヴェルディ）

〈日時〉12月6日19時／9日14時／12日14時／15日14時〈会場〉新国立劇場オペラパレス〈指揮〉カルロ・リッツィ〈演出〉ジョナサン・ミラー〈キャスト〉ロベルト・デ・カンディア（ファルスタッフ）、マッティア・オリヴィエーリ（フォード）、村上公太（フェントン）、小山陽二郎（医師カイウス）、糸賀修平（バルドルフォ）、妻屋秀和（ピストーラ）、エヴァ・メイ（フォード夫人アリーチェ）、幸田浩子（ナンネッタ）、エンケレイダ・シュコーザ（クイックリー夫人）、鳥木弥生（ページ夫人メグ）〈合唱指揮〉三澤洋史〈合唱〉新国立劇場合唱団〈管弦楽〉東フィル